

福祉文化を守る

園長 児嶋 草次郎

薫風にむかって、約 150 匹の鯉のぼりは元気に泳いでいます。風は目には見えず、私たち人間には肌をなでる心地よい春風のように感じられても、こうして鯉のぼりたちに力強く風に立ち向かうエネルギーを与えるのだから、不思議な異次元の生命体なのかもしれません。いつ頃から鯉のぼりがあげられるようになったのかは分かりませんが、これまで多くの子供たちが、風を一気に飲み込みながらたくましく泳ぐ姿に共鳴し、魂の中に希望と勇気という力を得て来たのでしょう。

友愛社の後援会の方々が子供たちを励ますためにあげるようになった鯉のぼりが、今年もはつらつと友愛園の水田の上で風に乗って泳いでいます。すばらしい日本の子育て文化だと思います。

そのように勇壮に泳ぐ鯉のぼりの下で、今年の田植えは、4月29日、30日の2日間（正確には1日半）で終わりました。今年は苗の生育状態が悪く、足りなくなるのではと心配しましたが、無事終了。小雨の2日間でしたが、子供たちもそれぞれにがんばり、達成感の中で、館長（リーダー）トモナの音頭で万歳を三唱することができました。

以下は、田植え後の後援者A氏との会話です。

A氏：鯉のぼりが今年も元気に泳いでいるというニュースを新聞で見て、電話してみました。確認したいこともありましたので。

私：いつも御支援ありがとうございます。今年も、後援会の皆様の御協力もあり、4月8日にあげることができました。橋田会長さんも来てくださいました。田んぼの土手に電柱を建てていて、それに電線を引っ張ってあげていますので、上げ下ろしの時、どうしても専門技術者の手をかりなければいけません。後援会の友草副会長さんの紹介で、毎年来ていただいています。のゆり・ひかり・やまぼと保育園職員を中心に、友愛園の子供たちもそれぞれ下された電線に鯉のぼりを結びつけました。ゆったりと泳ぐ姿はやはりいいですね。毎日色々な家族やアマチュアカメラマンが見に来ています。

A氏：すばらしい地域貢献でもあると思います。ところでコロナも落ち着いて、今年の8月の「石井十次セミナー」は、開催するのですか。3年間続けて中止になっているので、淋しくはありました。

私：ありがとうございます。今年は開催するつもりで、今準備を始めています。8月27日（日）です。中味が問題です。前回2019年（平成31年・令和元年）のセミナーでは、「グローバル化の中での改革、変えるべきもの、守るべきもの」というテーマで、日本の社会的養護を牽引して来られた大先輩方（叶原土筆氏、潮谷愛一氏、藤野興一氏、菊池義昭氏）に集まっただき、シンポジウムを開催させていただきました。それまでイギリス、ドイツ、アメリカ等から講師をお招きし、世界の社会的養護について学んで来たのですが、その集大成みたいな感じとなりました。

A氏：そのセミナー後、署名活動もやったよね。あれはどういう経緯があったんだっけ。3年もすぎ

ると、訳が分からなくなってしまう。

私：あの時は、御協力ありがとうございました。署名活動では結局約4万3000人の署名を集め、2021年（令和3年）12月22日に、厚労省の副大臣に「日本の福祉文化と子どもの未来を守るための要望書」と一緒に提出することができました。

あの時は、Aさんにもたくさん集めていただきましたね。次につなげていくために、その要望書の内容をここに再度確認しておきますね。

「日本の福祉文化と子どもの未来を守るための要望書」

平成29年8月2日（2017年）に厚生労働省より出された「新しい社会的養育ビジョン」では、乳幼児の施設への「新規措置入所の停止」と「施設の滞在期間の制限」を設けています。

この「ビジョン」は、社会的養護の世界標準に迫ろうとする挑戦ではありますが、現状における施設への入所制限は、子供たち多様なニーズの対応を狭め、また生活の場を奪ってしまうと危惧しております。日本の児童養護施設等が100年以上かけて培ってきた専門的機能を消失させます。先人たちが培ってきた子育て文化・福祉文化を尊重し、何より子供たちの多様な生活ニーズの充足を担保するため、下記のことを要望します。

要望事項

具体的には、以下の「新しい社会的養育ビジョン」の「（5）乳幼児の家庭養育原則の徹底と、年限を明確にした取り組み目標」の「新規措置入所の停止」および「施設の滞在期間の制限」に係る以下の二つの文言の削除を要請します。

一、乳幼児の「新規措置入所の停止」に係る以下の文書の削除

「3、新しい社会的養育ビジョンの実現に向けた工程」の（5）の「原則として施設への新規措置入所を停止する。」

二、「施設の滞在期間の制限」に係る以下の文書の削除

「3、新しい社会的養育ビジョンの実現に向けた工程」の（5）の「その滞在期間は、原則として乳幼児は数か月以内、学童期以降は1年以内とする、また、特別なケアが必要な学童期以降の子どもであっても3年以内を原則とする」

A氏：施設なんていうのは、厚労省から言えば、出先機関の末端部分で吹けば飛んでいくような存在だから、原則をどんと出して施設入所を停止したり制限したりすれば、里親委託率は一挙に70%にはね上がると読んだんだろうね。縦割り行政の弊害だね。委託率を上げることしか頭にはない。

私：確かに、上には盾突けない所が我々にはあります。しかし、あの原則どうりに地方行政が進めていたら、虐待などで家庭から放り出された子供たちの逃げ場、安らぎの場がなくなって、大混乱がおきていたと思います。あの要望書が小さな力かもしれないけど、一つのブレーキになったのではないかと、支援者の皆様には感謝しています。やはり、社会福祉法人や施設には、「後援会」が必要だとあの時は実感しました。第三者的な立場の人がモノを言わないと、縦割行政は独走していきます。

そもそもあの「ビジョン」が出されたのは、2017年（平成29年）でした。それまでの社会的養護の歴史から言うと、革命的な内容でした。私たちは、イギリス、ドイツ、アメリカの社会的養護を学んだ後でしたので、その本音を感じ取ることができました。アメリカの里親宅での生活期間は平均2年間、5年以上一つの里親宅で生活できるのは6%のみ、施設も1、2年で出て行かねばならない。そんな状況で、そのアメリカ人講師は、日本は真似をするなどと言っておられました。子供の最善の利益のためと言った大義名分はあるけど、要するに、アメリカ、イギリスの

数字に合わせるというのが目的だったと思います。

A氏：何もかにもが、グローバリゼーションの世の中になりつつあったからね。世界標準が善でそれに合わないものは悪。そんな価値観が国連の中でできつつあったのだろうね。それにストップをかけたのが、今回のコロナであり、ロシアのウクライナ侵略だね。私が、ロシアのプーチンのやり方に99.9%反対だけど、0.1%だけ共感する部分もある。それは、反グローバリズムだね。ウクライナがヨーロッパの価値観に組み入れられてしまうことに危機感を感じたのだろうね。強引に事を進めようとしたアメリカ、ヨーロッパのグローバリストたちにも責任はあるよね。

私：一度出した公文書の一部を変更したり削除したりすることはないそうですから、今後も、この「ビジョン」にそって変革は進められていくでしょう。宮崎県も令和2年にスタートして3年目に入ります。私たちは里親推進に反対しているわけではありません。当然、里親さんのところで育った方が幸せになるだろうと思える子どももいます。しかし、発達障がい系の子供たち、愛着障がい系の子供たちの場合、里親さんの所では厳しい。よほどの専門家であればうまくいくかもしれないけど、素人であれば疲れ果ててしまう。そういう子は、施設でチームで育てていった方がよい。今、宮崎県は、里親委託率は全国最下位です。これは私たちとしても何とかしなければいけません。

A氏：里親委託率の高い県がどこか知らないけど、里親委託率の高い県の子供は幸せで、低い県の子どもは不幸だといった資料は何か出されているのかい。「家庭」は尊重はしないとイケないけど、私には、一つの思いこみのようにしか見えないけど。友愛園の子供たちの書いた作文を「友愛通信」で時々読ましてもらうけど、しっかり育っていると思う。大学進学率50%以上で、普通の家庭と変わらない。何も劣る所はない。人間には色んな育ち方があってよい。里親宅だけが幸せになる場ではない。

私：話が長くなりましたけど、今年の「石井十次セミナー」の話をさせていただきます。先ほどの「要望書」の中で「福祉文化」という言葉を使いました。この「福祉文化」という言葉が今後、キーワードになるのではないかと考えています。厚労省の中にも各都道府県の行政の中にも、「ビジョン」派もいれば施設擁護派もいるでしょう。「ビジョン」派は、またグローバリズムが息を吹き返せば、強引に世界標準に持って行こうとするでしょうし、擁護派は慎重に子供の安心・安全を守ろうとするでしょう。

私たち現場の人間のやるべきことは何か。施設でも立派に子供は育って来たし、育っているということを地道に検証していくことだと思います。今、子供たちは、先人たちが作りあげて来た「福祉文化」の中で育っているのです。そこをアピールできなければならない。

例えば、友愛園の小規模児童養護施設「じゅうじの家」に、アメリカ、イギリス、ドイツの専門家を案内した時、そのグループホームが保育園、お年寄りのデイサービスと複合になっていること、そして職員が同じ屋根の下で寝食を共にしている姿を見て驚いておられました。欧米にはない仕組みなのです。これらは、先人たちが築いて来た文化です。「働く」という価値観が日本と欧米では随分違います。

日本人のすばらしい感性でしょうが、より利用者に寄り添って働こうとします。欧米人は平気で1か月休暇を取ったりする。それでは子供は育たず、施設も崩壊するでしょう。だから里親に頼るしかない。しかし、里親も個人主義者が多いから、合わなければ平気で契約を放棄する。

欧米の価値観に染まっている「ビジョン」派は施設を否定するのかもしれないけど、我々は、日本の特に社会的養護の世界で働いている職員たちのすばらしさを、アピールしていかなければなり

ません。そのためには、先人たちがどのような「福祉文化」を構築して来たのかを、まず検証していく必要があります。その作業をやりたいと思うのです。

A氏：すばらしいね。多くの欧米人たちは、日本人の感性や文化に魅力を感じて観光に訪れる。福祉文化も一つの文化だよ。ね。「ビジョン」派は、制度を変えてマニュアルを作って、カウンセリングをすれば子供は育つくらいにしか考えてないのかもしれない。「ビジョン」を読んで、日本の先人たちへの敬意とか感謝は一切感じられなかったね。生活文化的な発想が欠落している。

私：北海道家庭学校という自立支援施設は知っておられますか。留岡幸助という石井十次とほぼ同世代の先人が作った施設です。2020年（令和2年）に『家庭』であり『学校』であること」という本を出版され、送っていただきました。ちょうどコロナ禍であり、あまり注目はされませんでした。最近再度読み返しながら、まずここの「福祉文化」から学びなおそうと思い始めています。

A氏：留岡幸助は知っているよ。留岡幸助の築いた「福祉文化」を、過去の遺物とするのか遺産とするのか。「ビジョン」派はどうとらえるのだろうか。

私：私は大学卒業後、約1年間ほどこの施設で実習させていただきました。今、友愛園でできるだけ花を植えているのは、ここで学んだ文化です。ここでは、今だに夫婦小舎制を行っています。欧米の人から見れば、驚異の福祉文化でしょう。こんなことを実践できるのは日本人だけでしょう。

A氏：人類は約6万年前にアフリカで発生して世界各地に広がっていったと言われるけど、産み落とした我が子を自立させるために、色んな知恵を重ねて来ているよね。親に代って子どもを育てる児童養護施設は、その延長線上にある。特に思春期の時代に色んなトラブルにまきこまれる。先人たちはそうさせないための教育や養育を必死で考え実践して来た。それでも、トラブルや事件等は起きる。そういう時をねらって施設をたたき、つぶそうとするのは間違っている。一般の家庭でもそうなのだから、里親さんの所でも不幸なトラブルや事件は起きているだろうと思うけど、少人数だから目立たないだけだと思う。そういう時は、しっかり里親さんをサポートしてあげなければ、せっかく社会貢献しようと思って里親さんになったのに、逆に里親さんも子供も不幸にしてしまう。ロシアのウクライナ侵略じゃないけど、人間の世界はほんとうにむづかしい。戦争があっても大災害があっても、人類が存在する限り子育ては続いていく。子育てが続く限り、色んなトラブルと直面していかなければならない。

「石井十次セミナー」はめげずにがんばってください。期待しています。

私：ありがとうございます。「友愛通信」6月号くらいでは、御案内を送れるのではないかと思います。北海道家庭学校に関わる方を招聘したいと思います。ぜひ御出席いただき、御意見を賜りたいと思います。